

80年暮れ、下川鉱山で核のゴミ、地層処分に向けた試験計画が表面化。翌年4月、坑内で試験が始まった(提供: 名寄新聞社)

閣”。出たところ勝負をくり返し、原子力文明とは無縁な地域に「負の遺産」を押しつける状況が続く。

1954年、故・中曽根康弘氏らの働きかけで、国内初の原子力予算が急ぎよ計上された。しかし、政府による核のゴミの後始末に関する検討作業は手つかずで、69年に科学技術庁(現文部科学省)に検討会が設置されたのが始まり。2年後に出された簡単な報告書では、核のゴミの後始末は「今後の技術開発を待つ」とどまる。

70年代に入り全国各地で原発建設

が加速した。北海道内では、67年に道が泊、島牧、浜益の3村を建設予定調査の候補地として公表。候補地から外れた浜益村(現石狩市)をはじめ、神恵内村、大成町(現せたな町)、幌延町が「第2の原発」誘致に手を挙げた。このうち浜益村では、70年代に北電が原発建設用地126ヘクタールを青田買いして地域を混乱させたが、結局、建設は日の目を見なかった(浜益村発行『苦渋20年』はます原発『参照』)。

官民あげて「金のなる木」に夢を託す時代の中で、核のゴミの後始末について大まかな方針が初めて提示されたのは、76年の原子力委員会専門部会の報告書だった。そこでは「地層処分が有望と考えられるが、わが国においては調査研究は緒についたばかり」と述べ、2000年ころから処分場に収納するスケジュールも書かれている。この時点で、日本が原子力開発を始めてから20年余りも経過しており、いかに後始末問題に対する関係者の関心が薄かったのかを物語る。

当時の北海道は、岩内漁協が泊原発の建設に猛反対する中で、道が建設の積極的推進を再開した時期だ。

そこでも、将来の核のゴミ問題について、関係者が深く思いをめぐらせた形跡はない。

原子力委員会は80年暮れ、使用済み核燃料を再処理した後の対応策として「ガラス固化法の採用」と「キャニスター(固化体の収納容器)の地下埋設」を柱にした地層処分の道筋を示した。しかし、この時点で進んでいたのは、全国各地の鉱山の坑道を利用した基礎試験だけで、報告書は大まかな構想にすぎなかった。

下川鉱山で初の核のゴミ処分試験  
同じ80年代に幌延は誘致の動き

原子力委員会が処分スケジュールをまとめた80年暮れ、道北の下川町で操業していた三菱金属系の下川鉱山(83年に休山)で、自治体や住民には何も知らせることなく核のゴミは最終処分に向けた基礎試験の準備が進んでいた。実施主体は、のちに処分事業の主導権をNUMO(原子力発電環境整備機構)に奪われることになる、特殊法人の動燃(動力炉・核燃料開発事業団)である。

地元紙のスクープで実験の準備が明るみに出たもので、住民の間には「このまま核のゴミ捨て場になるの

では」との疑念が広がり、開会中の道議会の議論も一次中断した。当時の堂垣内尚弘知事(故人)は、「技術開発の基礎的試験であり、廃棄物の処分につながるものではないわたしとしても、それ(最終処分場のこと)を認める考えはない」と答弁。泊原発の建設を推進した同知事だが、核のゴミ処分地の受け入れには拒否姿勢を示した。この方針は、その後の横路孝弘・堀達也・高橋はるみの各道政にも継承され、事実上の「道是」になっている。

下川町での核ゴミ騒動は、首都圏での10年間におよぶ生活に区切りをつけ、82年に帰郷した筆者が原子力の「負の遺産」に目を向けるきっかけになった。しかし、この試験は3カ年で終わり、機材などは撤収され、今では当時を知る住民も少ない。

北電が「第2の原発候補地」を模索し、動燃が下川町で基礎試験を始めたころ、道北の幌延町は原子力施設の誘致運動に乗り出していた。

酪農の規模拡大にともなう負債増大や、公共事業に依存する土建業の業績悪化が目立ってきた80年ころから、過疎からの脱却を夢見る町や町議会の幹部らが原子力施設に着目。



1984年、動燃の事業所で発生するすべての放射性廃棄物を道北の幌延町に持ち込む「貯蔵工学センター計画」が浮上。危機感をいだく地元・周辺市町村の酪農民らが初の住民集会を開いた(85年11月、幌延町内で)

北海道電力泊原発の再稼働をめぐり、鈴木直道知事が12月中旬に容認・同意する流れになっているが、これは核のゴミ(高レベル放射性廃棄物)の元になる使用済み核燃料をさらに増やし続けることを意味する。最終処分地の選定に向けたNUMO(原子力発電環境整備機構)の事前調査をめぐり「現時点では反対」とくり返してきた知事は、果たしてどこまで核のゴミの発生源まで遡って問題点を考えているのか。そう疑問の目を向ける道民は少なくない。そこで今回から、1960年代に始まる本道での原子力関連施設の立地問題について、その歴史をたどりたい。第1回は、80年代に動燃の「貯蔵センター計画」で揺れた、いわゆる「幌延問題」を中心にふり返る。

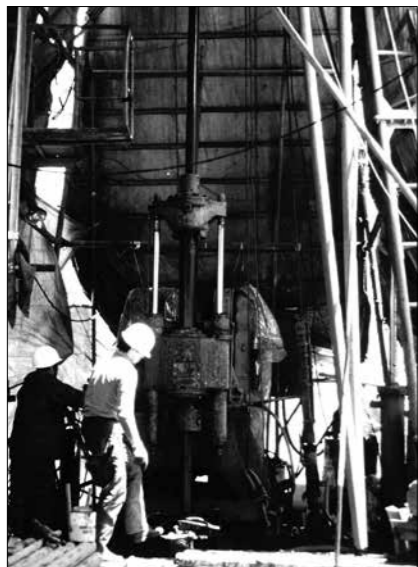
(ルポライター・滝川 康治)

日本の原子力政策が始まってから長い年月が流れたが、関係者の間に一貫しているのは、この無責任な思考パターンだ。高レベル放射性廃棄物核のゴミの最終処分に向けた青写真はあがあるが、実際には、砂上の楼

# 危うい「反対」の道是

## 無責任で場当たりの動燃に 翻弄され続けた自治体と道民

「(動燃の)下心としては地下研究施設(※深地層試験場のこと)がうまくいけば、次には実際の処分場の提案を考えていたと推測していた」と述べている。



幌延町開進地区で行なわれた動燃のボーリング調査

80年代の北海道は、場

もうひとつ、動燃の体質をよく表す資料がある。科技庁の官房長や原子力委員会の委員を務めた島村武久氏(故人)は、委員退任後の85年から94年にかけて、政策の中核にいた政財官などの関係者を招いて「原子力政策研究会」を主宰した。21世紀になり研究会の記録が公開されたが、こんな幌延関連の島村証言がある。

「幌延の計画について動燃の」吉田理事長は国会に呼び出されるまで知らなかった。理事長が下に訊いて、ようやく知ったって言うくらいで、動燃の一部の人が(貯蔵工学センター計画を)一所懸命やっていたわけだ。従って、後でいろいろ説明して理屈つけたわけですね」

つまり、幌延計画は一握りの動燃幹部の独走から生まれた、というわけだ。別の電力業界の出席者は、

ラム缶を最大120万本保管する計画をスクープ、幌延町の誘致話は広く知られることになった。

低レベル廃棄物施設が頓挫して杜撰な「貯蔵工学センター」浮上

低レベル施設の誘致話は中川氏の自殺や知事の交代などで頓挫したが、代わって84年4月に登場したのが動燃の「貯蔵工学センター計画」である。そこには、全国にある動燃の事業所で発生するすべての放射性廃棄物の「貯蔵」と、深地層試験場を造って処分地選定に必要なデータを集める「処分研究」がセットになった、壮大な構想が盛り込まれていた。

だが、中身がきわめて杜撰だったために、計画書は短期間に2回も書き換えられた。数百度にもなるガラス固化体の熱を利用した牛糞のメタン発酵・発電施設や園芸ハウス、養魚場、温水プール……といった荒唐無稽な構想(図を参照)も……。それらは核のゴミのイメージアップを狙った思いつきの内容である。

最終的には次の6つの施設を建設する計画になった。

①ガラス固化体の貯蔵プラント(固化体2千本・92年操業予定)

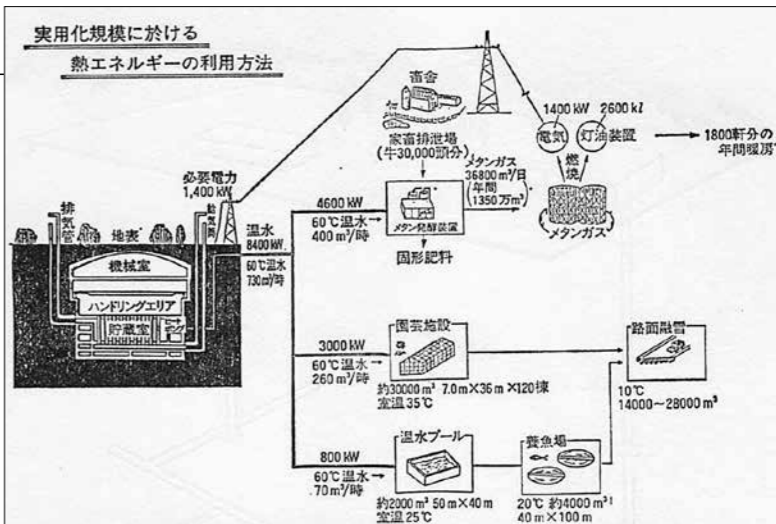


幌延町内で核ゴミ施設の危険性をアピールする近隣町村の人たち(85年11月)

凝らした運動が続く。「55年体制」が色濃く残る当時は、労働組合の力も強く、動燃による調査着手を監視するパトロール活動も展開された。

85年11月の「勤労感謝の日」未明、その監視の隙をついて動燃は夜陰にまぎれて現地踏査を強行した。調査隊5人は、幌延町役場の車で予定地の近くまで行き、そこから国鉄の線路伝いに2時間余り歩くなどして現地に到着し、地形の照合や機器類の設置位置にスプレーで目印をつける――道に対する事前通告もない卑劣

※筆者のHP「滝川康治の見聞録」<https://takikawa-essay.com/> に本シリーズの過去記事を収録しています。ご参照ください。



動燃は85年5月、ガラス固化体の熱利用というホラ話を載せた計画書を公表

②低レベルアスファルト固化体などの貯蔵施設(TRU)超ウラン元素廃棄物を含む・同)

③深地層試験場(87年ころからボーリングを開始)

④環境工学試験施設(92年の操業予定)

⑤研究開発棟(87年の操業予定)

⑥放射線管理施設など

動燃は当時、ガラス固化のための研究プラントを稼働させたばかりで、実物の固化体が初めてできたのは95年になってから。再処理工場のある



85年8月、道北の酪農民が初めて幌延町内でトラクターデモ

茨城県東海村には固化体の保管スペースがあるので、幌延の施設を急いで建設する必要はなく、「92年の操業予定」は辻褄あわせの計画だった。

83年から84年にかけて、動燃は幌延町とその周辺の約1400平方キロメートルを対象に、処分地層としての適否を秘密裏に調査している。全国25地区を対象にした適地調査の一環だが、道民にその内容は全く示されなかった。調査報告書が公開されたのは、調査の実施から15年も経過してからだ。

筆者は今から10年前、動燃の元主任研究員の土井和巳氏(地質学)から、核のゴミ最終処分についてインタビューした(本誌15年9月号に掲載)。記事の見出しには「わが国での地層処分は絵空事と贖罪の思いを込めて断言しよう」とある。

現役時代の同氏は、前出の適地調査にも従事したという。「どんなやり方だったのですか?」と尋ねると、「車で現場に赴き、ちよつと眺めて歩く感じでしたね」との答えが返った。一事が万事、動燃のやることはいい加減だったのだ、と思った。その動燃に、わたしたち道民は弄ばれたことになる。